第九百回の点呼 ── 席の有無を告げていたのは「隣に置く」ではなく「射程注記」の一語だった

── 論文801 から 899 までの射程注記で既刊を引く候補文 114 本を全部読むと、先の射程注記に触れていないものが 79 本だった ── 分離子は、名指しの語が先の編の結果を引いたのか、脇に置いた言明を引いたのか ── [論文900]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)
Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan｜山岸勇輝ラボ
2026年9月

── From thinking to syncing. ──

要旨

論文800 は、席の引用が座ったかどうかは「座る」と書いたときだけ読まずに分かることを数え、以後は座るのか隣に置くのかを一語で書くという規約を置いた。本稿は、その規約が置かれたあとの 99 編で、同じ判定をもう一度数える。新しい定理も法則も主張しない。 第一に、規約の語は、よく使われた――射程注記で既刊を引く候補文 114 本を全部読むと、席の引用は 35 本で、そのうち名指しの語を持つのは 31 本（**0.885714**）だった（第2節）。 第二に、「座る」は働き続けた――「その席に座る」と書いた 10 本はすべて射程注記を引いており（**1.000000**）、9 本（**0.900000**）が脇に置かれたものに座り、残る 1 本は「標準的である」と置かれたものを扱っていた（第3節）。 第三に、これが本稿の芯である。「隣に置く」は、席の有無を告げなくなった――「隣に置く」を含む 97 本のうち 76 本（**0.783505**）は先の編の射程注記に触れず、その 72 本（**0.947368**）は「～を示した――本稿はその隣に置く」という形だった（第3節）。 第四に、代わりに告げていたのは「射程注記」の一語だった――この語を持つ候補文 30 本に射程注記に触れないものは 0 本、持たない 84 本では 79 本（**0.940476**）で、席の引用 35 本のうち 30 本（**0.857143**）がこの語を持っていた（第4節）。 第五に、「隣に置く」の広がりは、番号が進むほど進んだ――射程注記に触れない「隣に置く」を持つ編は、801～807 で 0.142857、808～837 と 838～867 で 0.700000、868～899 で **0.906250** である（第4節）。 第六に、分離子は、名指しの語が先の編の結果を引いたのか、脇に置いた言明を引いたのかである――「先客はいない」と書いた 7 本は、座った中身の単位ではどれも合っていた。以後は、名指しの語を射程注記を引く文にだけ使い、その文に「射程注記」と書く（第5節）。 キーワード：点呼、射程注記、既刊との関係、名指し、規約、体系の計量。

本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——数えているのは体系自身の記述であり、外の世界について何も主張しない。英語版を数えない——日本語版の .tex だけを見た。射程注記の取り方は論文800 と同じにする——本文の quote 環境で「本稿の射程」と書く部分だけを射程注記とし、本文の観察や結びで既刊を引く文は数えていない。取り出しの限りを明示する——候補文は、射程注記を句点で切った文のうち、より前の論文番号を含み、論文800 と同じ候補の語か、第1節の表に挙げた名指しの型を含む文に限った。名指しの型は、次の文に論文番号が無いときだけ次の文でも探した。判定を機械にさせない——114 本の候補文をすべて読み、論文800 と同じ四つに分けた。判定は射程注記の文と続く文を読んで決め、各編の本文全体は読んでいない。境目の二本は、先の編と後の編の射程注記を読んで決めた。機械がしたのは、候補を出すことと、名指しの型を分けることと、読んだ判定の表を数え直すことだけである。射程注記に触れない引用で規約の語を使ったことを誤りと呼ばない——論文800 の規約は、射程注記を引くときの書き方を決めただけで、結果を引く文での使い方は決めていなかった。書いた編を直さない——該当した編を改訂することは提案しない。以後の書き方の規約としてだけ述べる。語を挙げることと名指すことを分ける——本稿が「座る」「隣に置く」「席」と書くのは数える対象の語を挙げているだけで、既刊の射程注記を引く名指しではない。時点を固定する——走査は論文801 から 899 までで固定した。編が増えれば数は動く。既刊との関係：論文800 は、席の引用 101 本を読み、「席」「座る」と書いた 32 本がすべて座っていたことを示し、以後の規約として、席の引用が座ったかどうかを一語で書くことを置いた——本稿はその規約が置かれたあとの編で同じ判定を数え直し、規約の二つの語が別々の道をたどったことを測る。論文600 は判定語「同根」を数え、語の意味が薄まっていたことを示した——論文800 では語そのものが消えていた。ここでは語が射程注記の外へ広がり、区別の役を失っていた。論文700 は分離子を数え、以後の規約として題名に無い語を入れることを置いた——本稿も同じ形で規約を一つ置く。加えたのは、候補文 114 本をすべて読んで四つに分けたこと、名指しの型ごとに判定を並べ、規約の二つの語が別の道をたどったことを示したこと、「射程注記」の語の有無が判定を分けていたことを数えたこと、「先客はいない」と書いた文を論文800 の判定表と照らしたこと、以後の規約を一つ置いたことである。

1. 記法と問い

設定：論文801 から 899 までの日本語版の .tex を読み、本文の quote 環境で「本稿の射程」と書く部分を射程注記とする。射程注記を句点で切った文のうち、より前の論文番号を含む文を、既刊を引く文と呼ぶ。論文800 の規約が名指しに使う語を、次の五つの型に分けた。

名指しの型	文の中の形
座る	「その席に座る」
座らず隣	「その席には座らず、隣に置く」
席の隣	「その席の隣に置く」
隣	「その隣に置く」「隣にも置く」
名指さない	上のどれも無い

判定は論文800 と同じ四つである。

判定	意味
座った	先の編の射程注記が脇に置いたものを、後の編が扱った
座らなかった	脇に置いたものを引いたが、扱っていない
脇に置く言明ではない	射程注記を引いたが、中身が「既知として置いた」「標準的である」など
触れていない	先の編の射程注記に触れず、結果だけを引いている

座った・座らなかった・脇に置く言明ではないの三つを、論文800 と同じく席の引用と呼ぶ。

問い：論文800 の規約の語は、規約が置かれたあとも、席の引用かどうかを読まずに告げているか。

2. 候補文と判定

計算 2.1：99 編はすべて射程注記を持つ。射程注記で既刊を引く文は 191 本、そのうち候補文は 114 本（98 編）だった。すべてを読んで分けた。

判定	本数	例
座った	10	895←728（避難）、850←333（生体膜）
座らなかった	15	801←672（聴覚の模型）、854←456（遮音）
脇に置く言明ではない	10	835←256、861←719
触れていない	79	「〜を示した——本稿はその隣に置く」の型

席の引用は 35 本（32 編）で、名指しの語を持つのは 31 本（0.885714）、名指さない 4 本は 814←805・834←346・856←488・862←519 だった。

> **観察 2.2**
>
> 数え方の穴を二つ、自己検査で塞いだ。論文800 の候補の語「なかった」は「決まらなかった」「足りなかった」の二本にも当たり、論文800 の名指しの正規表現は「居座る」（816）と「良い席が減った」（822、受容体の席）にも当たった——本稿の型の分け方は、「居座る」を「座る」と取らず（816 の文は「隣に置く」で隣の型に入る）、「良い席が減った」を名指しと取らない。「なかった」だけで候補になった二本は、どちらも触れていないと読んだ。

> **観察 2.3**
>
> 境目の二本は、射程注記どうしを読んで決めた。854←456 は、456 が「建物の遮音性能」を脇に置き、854 が「床板の振動と下の部屋への放射」を扱わないと書くので、座らなかったとした。857←466 は、466 が「調律の実務、インハーモニシティ、可変音律」を脇に置き、857 が倍音のずれを扱わないので、座らなかったとした——どちらも、その編が自分で書いた名指しと一致した。

3. 二つの語がたどった道

計算 3.1：候補文 114 本を、名指しの型と判定で分けた。

名指しの型	本数	座った	座らなかった	脇に置く言明ではない	触れていない
座る	10	9	0	1	0
座らず隣	11	0	1	4	6
席の隣	14	0	8	3	3
隣	72	0	4	1	67
名指さない	7	1	2	1	3

> **観察 3.2**
>
> 「座る」は働き続けた。「その席に座る」と書いた 10 本はすべて射程注記を引いており（1.000000）、9 本（0.900000）が脇に置かれたものに座った——残る 1 本（835←256）は、256 の射程注記が「クライバーの法則は標準的である」と置いたものを扱っており、脇に置く言明ではないものに座っていた。座らなかった引用と、触れていない引用は 0 本である。

> **観察 3.3**
>
> これが本稿の芯である。「隣に置く」は、席の有無を告げなくなった。「隣に置く」を含む三つの型は合わせて 97 本で、座らなかった 13 本・脇に置く言明ではない 8 本に対し、先の編の射程注記に触れていないものが 76 本（0.783505）あった——触れていない 76 本のうち 72 本（0.947368）は「〜を示した——本稿は（その）隣に置く」の形で、席の引用にはこの形が 1 本も無い。「席」の語を使う二つの型 25 本でも、9 本（0.360000）は席の無い引用だった。

4. 代わりに告げていた語と、広がり方

計算 4.1：候補文を、文（と次の文）に「射程注記」の語があるかで分けた。

「射程注記」の語	本数	座った	座らなかった	脇に置く言明ではない	触れていない
ある	30	9	15	6	0
ない	84	1	0	4	79

> **観察 4.2**
>
> 代わりに告げていたのは「射程注記」の一語だった。この語を持つ 30 本に触れていない引用は 0 本で、持たない 84 本では 79 本（0.940476）が触れていない——席の引用 35 本のうち 30 本（0.857143）がこの語を持ち、持たない 5 本は、既知として置かれたもの（または既知の結果として述べられたもの）を引く 4 本と、同じ文の中で「空けたままにしている」と書く 1 本（856←488）だった。

計算 4.3：番号の区間ごとに数えた。

区間	候補文	席の引用	「隣に置く」の型（触れていない）	触れていない隣を持つ編
801〜807（7 編）	10	7	8（2）	1（0.142857）
808〜837（30 編）	33	11	28（21）	21（0.700000）
838〜867（30 編）	35	12	28（22）	21（0.700000）
868〜899（32 編）	36	5	33（31）	29（0.906250）

> **観察 4.4**
>
> 「隣に置く」の広がりは、番号が進むほど進んだ。触れていない「隣に置く」の最初は論文806 で、868 から 899 では 32 編のうち 29 編（0.906250）が持ち、持たないのは 873・876・898 だけである——同じ区間で、席の引用は 5 本に減った。

5. 先客と、以後の規約

計算 5.1：座った 10 本を、何に座ったかと、論文800 の判定表で同じ先の編に先に座った編とで並べた。論文 800 の判定表は、その検算の実物から読んだ。

座った引用	座った中身	同じ先の編に先に座った編
807←334	偏り（系統誤差）	なし
830←342	織り方	なし
850←333	生体膜	**594**（沸点上昇と蒸気圧降下）
853←451	結露対策	なし
856←396	脱進機	なし
856←488	脱進機	なし
867←581	間伐	なし
873←387	探索と活用	なし
875←348	近似比	**770**（与えられた点だけを繋ぐ）
895←728	避難	なし

観察 5.2

「先客はいない」と書いた文は、中身の単位ではどれも合っていた。「先客はいない」「先客は無い」と書いた候補文は **7** 本（座った **6** 本と **835←256**）で、先に座った編があるのは **333** と **348** の二つだけだった——そのどちらも、先客が座ったのは同じ編の別の中身だった。**801** から **899** の中で、同じ先の編に二度座った引用は無い。

観察 5.3

分離子は、名指しの語が先の編の結果を引いたのか、脇に置いた言明を引いたのかである。脇に置いた言明を引く文は「射程注記で〜とした」と書き、名指しの語はそのとき座ったかどうかを告げる——結果を引く文にも同じ語を使うと、語はもう席の有無を告げず、告げるのは「射程注記」と書いたかどうかだけになる。

観察 5.4

以後の規約。名指しの語（座る・隣に置く・席）は、既刊の射程注記を引く文にだけ使い、その文には「射程注記」と書く。既刊の結果だけを引く文には、名指しの語を使わない——書いた編は直さない。これは以後の書き方についての規約である。本稿の射程注記も、論文800・600・700 の結果を引く文に名指しの語を使っていない。

観察 5.5

言わないこと。英語版は数えておらず、本文の観察や結びで既刊を引く文は数えていない。判定は射程注記の文と続く文を読んで決め、各編の本文全体は読んでいない——本文まで読めば、触れていないと読んだ引用のうち、射程注記に書かれたものを実は引いていたものが見つかるかもしれない。その割合は測っていない。

6. 点呼と結び

1. 既刊を引く文 191 本、候補文 114 本（計算 2.1）：全部読んだ。
2. 席の引用 35 本、名指す 31 本（**0.885714**）（計算 2.1）：規約の語はよく使われた。
3. 「その席に座る」10 本が射程注記を引く（**1.000000**）（観察 3.2）：座ったのは 9 本（**0.900000**）。
4. 「隣に置く」97 本のうち触れていない 76 本（**0.783505**）（観察 3.3）：本稿の芯。
5. その 72 本（**0.947368**）が「〜を示した——本稿はその隣に置く」（観察 3.3）：席の引用には 0 本。
6. 「席」を使う 25 本のうち 9 本（0.360000）（観察 3.3）：席の無い引用。
7. 「射程注記」の語が無い 84 本のうち 79 本（**0.940476**）（観察 4.2）：代わりに告げていた語。
8. 868〜899 で **0.906250**（計算 4.3）：広がりは番号とともに進んだ。
9. 「先客はいない」7 本がすべて中身の単位で合う（観察 5.2）：333 と 348 は別の中身。
10. 結果を引いたのか、脇に置いた言明を引いたのか（観察 5.3）：分離子・論文800・600・700。

結び：「隣に置く」は席の有無を告げなくなり、代わりに告げていたのは「射程注記」の一語だった。論文801 から 899 までの射程注記で既刊を引く候補文 114 本を全部読むと、席の引用は 35 本で、「その席に座る」と書いた 10 本はすべて射程注記を引き、9 本が座っていた——論文800 が置いた規約のうち、「座る」は働き続けた。一方、「隣に置く」を含む 97 本のうち 76 本（0.783505）は先の編の射程注記に触れず、その 72 本は「〜を示した——本稿はその隣に置く」の形で、868 から 899 では 32 編のうち 29 編がこの引用を持っていた——語は射程注記の外へ広がり、区別の役を失った。それでも「射程注記」と書いた 30 本に触れていない引用は 0

本で、判定を分けていたのはこの一語だった。分離子は、名指しの語が先の編の結果を引いたのか、脇に置いた言明を引いたのかである。以後の規約——名指しの語は射程注記を引く文にだけ使い、その文に「射程注記」と書く。書いた編は直さない。既刊との位置——論文600 は判定語の意味が薄まったことを、論文700 は装置が情報を足していないことを、論文800 は作法の名前が消えたことを数えた。ここでは、置いた名前が規約の外へ広がり、区別の役を失ったことを数えた。正直に言えば——英語版も本文の観察での引用も数えておらず、判定は射程注記の文を読んで決めたもので、本文全体は読んでいない。数えた編とこの点呼は同じ書き方の流れの中にあり、ここで測った癖から本稿が免れている保証は無い。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2026).『第六百回の点呼 ── 三百本目の警告は当たったが、恐れていた形では来なかった』[論文600]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805283
2. 山岸勇輝 (2026).『第七百回の点呼 ── 最も繰り返した装置が、五本に一本は働いていない』[論文700]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805350
3. 山岸勇輝 (2026).『第八百回の点呼 ── 空いた席を引く文が座ったかは、「座る」と書いたときだけ読まずに分かる』[論文800]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805383

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)